

の人が見て、死んでいると言う。死んだら、すぐに幕舎の外に出す。すぐにろうそくのように白く凍って、本当に見る影もない。人間の冷凍である。そのように死んでいった戦友はたくさんにある。名も知らぬ。顔も知らない。どこに埋葬したか、私は知らない。収容所で、ロシア兵の残飯を拾いに行つて銃殺された兵士もいた。本当に無残なものである。

私も満州から出発する当時は、体重七十二キロもありましたが、帰国するときには五十二キロになり、栄養失調で、二十二年七月十一日、舞鶴に帰った。満七十歳。今は元気で余生を送っております。これから先何年か、亡くなった戦友の冥福を、毎日毎日、祈つて暮らしていきたいと思っております。

苦難のシル河工事

鳥取県 持田 一男

沿海州ポシエツト港から汽車に乗せられて二十日余

り、到着したところは中央アジア、カザフ共和国のクズオルダという砂漠の中の一小都市であつた。

ポシエツト港を出たのが八月の上旬で、シベリア鉄道を西へ西へと走り、ノボシビリスクから南下して、この地に着いたのはもう九月にもなるうかといふころであつた。下車してから町の中にある公衆浴場で約一か月ぶりに入浴をし、そこからトラックに乗せられて砂漠の中の道を約数十キロばかり走り収容所に着いた。

収容所に着いた私たちは、長い汽車輸送の疲れをいやす暇もなく、翌日から早速強制労働に狩り出されることになった。

我々が、はるばるこの地に連行され、労働に従事させられた真の目的は、ソ連側の計画でこの地に一大コルホーズをつくることであつた。そのためには、膨大な面積にわたる農場へはるか遠く離れたシル河より水を引いてくる必要があり、この水路工事へ日本人捕虜が投入されたのだつた。この作業こそまさに悲劇の連続であつた。

幅二十メートル、深さ四メートル、長さ二キロメートルのこの水路開削工事は、極端な食糧不足と骨身を刺す寒気と戦いながら、我々がこの収容所を去るまで続けられた。

十一月になれば、短い秋はすでに去り、はや冬である。水に氷が張ってそれまで屋内作業をしていた者も大部分は水路工事に動員された。患者でさえろくに休むことができず、痛む体を引きずって作業に出かけなければならなかった。

食糧不足と寒さのために、栄養失調と凍傷患者が続出するようになった。日曜日は越冬準備で忙しく、天井に泥を塗り、ペーチカをつくり、入り口を補修し、何キロも離れたところへ燃料のまき採集に出かけねばならず、少しも休むことができなくなった。まきといっても、平原に生えている灌木で、これを根ごと切りとって持って帰るのである。これが唯一の暖房用の燃料であり、また炊事用の燃料でもあった。

毎日の作業量は増大し、糧食は少なく、そのため病に倒れる者が続出した。そこでソ連側は毎月の初めに

身体検査をするようになったが、それも労働に耐える者と、そうでない者、つまり使える者と使いものにならない者とを区別するためであって、個々の体格等位を決めることにより作業基準が決められた。すなわち身体等の等位は一種、二種、三種、オカに分かれ、一種と二種は重労働に耐える者、三種は軽労働に従事させる者とし、二種は一種の八掛け、三種は五掛けとして作業基準が決められた。またオカというのは、薄弱体力者として所内に残り、ごく軽い作業、すなわち炊事当番や所内の掃除、あるいは不寝番といった勤務にくく。このようにしてオカ以外の者は残らず所外の水路工事に出かけて行かねばならなかった。

作業中寒さのために仕事ができず、両手に息を吹きかけ、足踏みをしながら寒気に耐えていると、ソ連の監視兵や作業監視員がやってきて、「仕事を続けろ、働くんだ」と言つて、銃で殴りつけられたこともしばしばであった。暖をとるためたき火をしようにも燃料がままならず、ただ付近にまばらに生えているいばらの灌木を切ってきて燃やした。しかし、それも次第に

なくなり、しまいにはその根っこを掘りおこしてたかねばならなかった。しかも作業中には、ソ連側の監督が厳しいので、大っぴらにたき火に近寄ることもできない。

朝八時から始まる作業も、大体十時ごろまではどうやら元気があって、お互いに故郷のことや食いの話をしながらモッコを担いでいるのだが、十二時を過ぎるころになると腹が減ってきて一人も物を言う者がいない。ただ黙って下を見ながらモッコを情性で担いでいるだけだ。

このような状況のもとでしばらく作業は続けられたが、これでは能率が上がらぬので、昼食を収容所からトラックで運んでくるようになった。だが、この昼食といっても、そもそも一日二食しか与えられていなかったのに、その分量を三回に分けて、一回分を昼にまわしたに過ぎない。それも作業現場で各人に分配されることになる、すっかり冷えてしまい、スープには氷さえ浮かんでいる。それを食ったあとは腹の底まで冷えてしまう。食後の休憩もなく、火に暖まることさ

えできず、またぞろモッコを担いで土運搬を始めねばならぬ。それもノルマ百二十五%遂行のためにである。一日の作業が終わり、夕日が地平線に没するころになって、重い足を引きずってソロソロと宿舎に帰ってくる姿は、全く哀れなもので囚人の姿そのものだ。すっかり腹を減らしてしまい、隣の者と話をする気力もない。

そのうち、だれかれとなく栄養失調でやせ細って骨と皮になり、ついで足や顔が黄色くなってむくみ出す。小石につまづいても倒れるほど体力を失ってしまった。小便は黄色いのを通り越して褐色となり、尿意をもよおしたら我慢ができず、便所に行くまで待ちきれない。しかもたまった小便を一度に出し切れないで、少しずつポタポタとちびるのだ。夜間に寝小便をする者も多く、彼らは朝になってぬれたズボンを乾かす暇もなく、そのまま作業に出て行かねばならず、戸外に出ればぬれたそのズボンはすぐカチカチに凍ってしまうのだった。

凍傷患者や栄養失調患者が続出し、おまけに急性肺

炎が流行して一命を落とす者が出だした。これらはやむなく茫漠の野に葬られたが、ただ毛布にくるんで運び、細長く掘った穴に埋めて土をかけておくだけであった。手折って供える野花もなく、線香のかわりに紙切れで手巻きしたマホルカ（刻みたばこ）の煙が、寒い北風にくすぶっているだけであった。

悲愁のラーゲル

岡山県 埴和恵三

概要

この記録は、在ソ生活は私の生涯の歴史の一頁になるものと思い、入ソ時から要点を記録していた日記簿を、帰国の折ソ連側に没収されたので、帰国（昭和二十四年八月）後直ちに忘れぬ間にと記憶をたどりながら約四か月を費やして書いたものであり、その抜粋を、出発時から目的地到着時までと、目的地到着時から昭和二十年十二月末時までに分け書いて提出しま

す。なお、手許にはその後、昭和二十四年八月四日舞鶴港上陸まで続いておりますが、何分文才のない素人の記録で人様の前に出せるようなものではありません。

私の記録

昭和二十年十月二十日午後三時ごろ牡丹江駅を発車した輸送列車は翌二十一日に綏芬河駅に到着した。ソ連側の命により編成した一列車千人一個大隊の組織は次のとおりであった。

第一一八輸送大隊（ソ連側の指示）

大隊長 陸軍大尉吉井よ造

（一）内出身部隊

經理小隊（長） 南野准尉（十一飛大）

第一中隊（長） 田中中尉（十飛大）

第二中隊（長） 井原中尉（十一飛大）

第三中隊（長） 神長中尉（十一飛大）

第四中隊（長） 吉永中尉（二航通）

ソ連側は戦争は終了したので内地（日本）へ送還す